P37

インドネシア・スンバワ島住民の腸管寄生虫症調査 柳哲雄¹, O.S. Juarez¹, 村上愛², A. Galvez¹, Machfudz³, S. Kocsdarto³, Y. P. Dachlan³, 神原廣二¹ (長崎大・熱研・病原体解析, ²長崎大・薬学・臨床薬学, ³Tropical Disease Center, Airlangga Univ., Surabaya, Indonesia)

2000年9月(乾季)にインドネシア・スンバワ島の3つの村(Stowe Berang 村, Penyaraing 村, Labangka 村)で住民の糞便検査(総数283名分)を実施した。検査数の内訳は順にそれぞれの村から85名, 103名, 95名であった。原虫ならびに虫卵の検出は, すべての糞便を一度ガーゼでろ過し, その沈さの直接検鏡と, 蔗糖を用いた濃縮法の二方法でおこなった。

感染率に違いがあったのは, ST村で45%に*E. coli* (他の二つの村では10数%)を, 同じST村で8%に*E. histolytica* (他の二つの村では3%)を検出した。またぜん虫卵では, L村で48%に鉤虫卵(他の二つの村では6%以下)を, 同じくL村で12%に蟯虫卵(他の二つの村では2%以下)を検出した。原虫のシストは概して直接法の方が, 鉤虫卵と蟯虫卵は蔗糖浮遊法による方が検出率が優った。

ところで1998年に同じ三つの村で285名(ST村107名, P村110名, L村68名)の住民から血清を収集し, クリプトスポリディウムに対する抗体(抗*C. parvum* オーシスト)を調べたところ, 52%の住民が抗体陽性であった。しかし, 今回283名の糞便中には蔗糖浮遊法でもクリプトスポリディウムを検出なかった。またP村で収集した24頭の牛の糞便中にもクリプトスポリディウムを検出なかった。赤痢アメーバについてはPCRで病原性を確認することにしている。

P38

マレーシアの移民労働者における腸管寄生線虫類の感染 ○記野秀人¹, ノア・ハヤティ², ノアハヤティ・モクター², チャン・ブーン・テク², モハメド・アブドゥラ・マルウィ², スライマン・オスマン², 寺田 護¹ (1 浜松医大・寄生虫, 2 国立マレーシア大・寄生虫)

われわれは周辺諸国からの移民労働者が多いマレーシアにおいて, 輸入寄生虫症の実態を把握する目的で移民の持つ寄生虫感染について1998年から総合的な調査を行ってきた。今回はその中で腸管寄生線虫類の感染についてまとめた。移民には合法移民と密入国による不法移民がある。合法移民についてはスランゴール州カレー島のヤシ油プランテーション、不法移民についてはネグリ・センピラン州レンゲンの抑留キャンプをそれぞれ調査地とし、各3回の調査を実施した。糞便検査にはセロファン厚層塗抹法と濾紙培養法を併用した。

厚層塗抹法では一部に蟯虫卵が見つかった他は回虫、鞭虫、鉤虫のみが見出された。濾紙培養法では鉤虫の他に糞線虫が見つかった。鉤虫はほとんどがアメリカ鉤虫であった。各群における感染率には大きな差はなかったが、回虫では予想に反して不法移民の感染率が最も低かった。しかし、平均虫卵数では逆に最も高く、特定の感染者が著しく高密度に感染している傾向が見られた。これは主にインドネシアからの不法移民で顕著であった。同様に出身国別に見ると、インドは回虫、鞭虫の感染率が著しく低いなど国による違いが大きかった。これらのことから移民の出身地での環境が腸管寄生線虫類の感染に大きな影響を及ぼしていることがうかがわれた。

P39W6-5

ボリビア及びパラグアイの日系人移住地でみられた腸管寄生虫症に関する問題点について ○安倍正史¹、三浦左千夫²、山田知恵³、井上和雄³、仁田原憲二⁴、岡田潤⁵、中村文規¹ (1 昭和大・医・医動物、2 慶応大・医・熱帯医学・寄生虫、3 オキナワ移住地診療所、4 サンファン移住地診療所、5 イグアス移住地診療所)

演者等は、1999年11月から12月にかけて、南米での日系人移住地での寄生虫症の実態を探るため、イグアス移住地(パラグアイ)、オキナワ移住地(ボリビア)及びサンファン移住地(ボリビア)の各診療所を訪問し、現地医師等の協力のもとに、一般住民(日系人が主、生後7ヵ月—80歳までの計153名)の腸管寄生虫の感染状況を調べた。その結果、いずれの移住地でも、調査した一般住民の間に高濃度の腸管寄生虫の感染(被検者の平均陽性率が、イグアスで、60.6%、オキナワで43.2%、サンファンで21.7%)が認められた。また、感染寄生虫種としては、イグアスで、ト・ブ・ラ・スチス(被検者の36.4%)、ト・ブ・ラ・スチス(24.2%)、ランブル鞭毛虫(18.2%)、ハルトマンアメーバ(12.1%)、小形アメーバ(9.1%)、大腸アメーバ(6.1%)、ラブシチス型幼虫(3.0%)の計7種、オキナワで、小形アメーバ(17.6%)、*Entamoeba histolytica*/*E. dispar*(10.8%)、ランブル鞭毛虫(9.5%)、回虫(5.4%)、アメリカ鉤虫(4.1%)、ト・ブ・ラ・スチス(4.1%)、糞線虫(2.7%)、大腸アメーバ(2.7%)の計8種、サンファンで、*E. histolytica*/*E. dispar*(8.7%)、ト・ブ・ラ・スチス(8.7%)、ラブシチス型幼虫(4.3%)、小形アメーバ(2.2%)、ランブル鞭毛虫(2.2%)、メニル鞭毛虫(2.2%)、回虫(2.2%)及び小形条虫(2.2%)の計8種であった。イグアスやオキナワでは、他に皮膚爬行症や三日熱マラリアが伝聞にて認められ、また、各移住地で、被検者家族子弟の半数以上が本邦各地へ出稼ぎしていることが判明した。

P40

パラグアイ共和国の腸管寄生虫陽性者における血液検査 ○斎藤 奨¹、小石麻由美²、Stella Mary Gonzalez³、Felicitia Cristina de Duarte³、小早川隆敏⁴、仙道富士郎¹ (1 山形大・医・免疫・寄生虫、2 長崎市、3 パラグアイ・カアサバ・第6衛生行政区、4 東京女子医大・国際環境・熱帯医学)

南米・パラグアイには貧血の患者が多く、その原因の一つを鉤虫に求めているが、データはない。これらの関係を明確にするために鉤虫陽性者とヘモグロビン値、ヘマトクリット値および赤血球数との関係を調べた。ボケロン地区の一般住民58名の結果では、血液の検査数値とアメリカ鉤虫陽性者および陰性者との間に全く有意差を認めることはできなかった。次にカアサバ県の5小学校児童628名について末梢血のヘモグロビン値を測定したが大部分が正常値を示した。以上の結果は貧血の主な原因は鉤虫寄生より食生活の改善を考慮すべきと考えた。一方、カアサバ市近郊の4小学校児童については白血球像と検便を実施した。検査数合計417名のうち白血球中の好酸球が占める割合は0—39%であり、好酸球増多症は原虫単独陽性者群や陰性者群より蠕虫単独陽性者群や蠕虫・原虫混合陽性者群の方が有意に多かった。寄生虫陰性者群でも62.2%が好酸球増多症であり、Ouchterlony法によるイヌ蛔虫症の有無を小学校児童79名について調べたが、2名のみ陽性であった。このことはカアサバ県の好酸球増多症は他にも原因を求めなければならず、本県に多く見られるアレルギー症など、さらなる広範囲の疾患との関連性を調査する必要がある。